

入選

未来に続け 「はこだての水」

北海道 函館白百合学園中学校

三年 泉 采七

桜の季節になった。函館にはいくつかの桜の名所があるが、水源地や水道公園もたくさん桜が咲き、多くの人々が訪れる憩いの場だ。私もピクニックによく行って、楽しんだりする。この場所は、四季折々の自然の恩恵を受け、私達に大切な水を運んでくれる源でもある。

ちまたでは、飲用水として加工した水が数限りなく売られている。函館でも「はこだての水」という商品が売られているが、それは新たに加工したのではなく、函館の水道水をそのままペットボトルにパックしたものだ。函館市水道局によると函館の水道水は、厚生労働省の「おいしい水研究会」が示した「おいしい水の要件」をほぼ満たして、「安全でおいしく飲める水」なのだ。普段飲んでいる水が、そのまま商品として売られていることに驚くとともに、この水がこんなにも高品質なのだと感じさせられた。

そこで私は、この函館の水のルーツをひも解いてみた。日本最初の貿易港である函館は、西洋文化を受け入れた国際都市であるのにもかかわらず、明治時代には、水の便が悪く飲料水にも恵まれず、大火やコレラの犠牲になっていた。市民の要望もあり、国内二番目の近代水道として、日本人の設計・監督による初めての水道施設が完成した。函館のダムの一つである笹流ダムは、驚いたことに函館出身者による設計で作られた。このように、先人の困難や苦労があったからこそ、今の「はこだての水」があるのだと思う。

エコという言葉が飛び交う時代、私達の水の使い方はこのままで良いのだろうか。水は自然の賜物である。他の資源と同様、限りのあるもの。飲用はもちろん、食器洗い・お風呂・洗濯等に使っている。

「飲む水より、食器洗いに使う水の方が数倍も多いよね。」
台所で食器を洗いながら、ふと言った母の言葉に、私も「そうかもしれない」と思った。そこで、私の家の水道使用量を調べてみると、一回の食事で使用する水量は、一リットルのペットボトル一本も使わないのに対して、野菜や食器を洗うのに三本も使った。この結果から、「安全でおいしく飲める水」なのに、

ほとんどが下水道に流れていくだけのようで、とてももったいないと思った。世界では、安全な水を求めて何時間もかけて瓶一本の水を汲みに行く国もあるというのに。

ただ無駄な家庭排水となってしまう水の量を少しでも減らすように、水の流しっぱなしを止める。また、正油大さじ一杯をきれいな水にして海に流すためには、お風呂三杯分の水が必要となるので、お皿に付いた汚れをきれいに拭いてから洗うようにする。そうすれば、水質汚染も軽減でき、自然への恩返しも出来るのではないだろうか。

私は今回、普段使っている水について色々調べることに、函館の水の良さや自分の水に対する認識不足を改めて感じた。誇りある「はこだての水」だからこそ、函館市民をはじめとする人々に、もっと函館の水の素晴らしさを知ってもらいたい。そして、このような安全でおいしい水が、蛇口をひねると当たり前に出てくることの大切さと幸せを感じて欲しい。この大切な水が未来へと続いていくように、今、この時から私も節水を心掛け、水を大切にしていきたいと思う。皆が、より一層水について関心を持ち、考慮した行動をすれば、一人ひとりから、家族、クラス、学校、地域へとどんどん浸透していき、きっと大きな変化をもたらすはずだ。未来の「はこだての水」をつくるカギは、私達が握っているのだから。

入選

「その一滴の水が、百人の未来を紡ぐなら」

秋田県 横手市立鳳中学校

三年 山田 悠

「震災を経験して、一滴の水がいかに大切かを始めて知った。」これは、阪神・淡路大震災を経験した一人の女性の言葉です。私はこの言葉を聞いて、水の大切さに初めて興味を持ちました。「蛇口をひねれば水が出る」当たり前的事かもしれないけれど、一度震災が起きれば、これは当たり前的事では無くなってしまふ。私は生きるために必要な水の大切さを考える事で、今までの、水に対する自分の考え方が変わるんじゃないかと思い、急いで阪神・淡路大震災について調べ始めました。

平成七年一月一七日五時四十六分、突然その時は来しました。阪神・淡路大震災が起こったのです。この震災では、六千名という尊い命が一瞬にして奪われていきました。また、奇跡的に助かった人々も全くもって安心出来なかつたと言います。何故なら、水道、ガス、電気と言った、私達が生きるうえで必要最低限のライフラインが全て寸断されてしまったからです。

特に私は、この震災で起きた「断水」という深刻な問題に着目しました。「いつ水が出るかわからない」と言う不安と焦りの中で、たくさんの人々が葛藤したと思います。それだけで無く、水が出ないことで火事で出た火を消火する事も出来ませんでした。消えていく命を見て、ただ呆然と立ち尽くす事しか出来ず、下を向き涙をこらえる消防員の姿は写真にもおさめられています。

「もつと知りたい！」と、どんどん調べていくうちに私は、「断水」についての気になる項目を見つけました。それは「コップ一杯の水でどれだけの事が出来るのか」と言うものです。震災を経験した事のある、一人の主婦の方が実験したところによると、歯磨きで口をすすぐまでを終わらせたり、シャンプーで髪を洗ったりなど様々な事が出来る様でした。しかし私は、このことを聞いて疑問に思いました。「本当に、コップ一杯の水でこんなにたくさん事ができるの？」どうしても気になった私は、比較的簡単に試せそうなコップ一杯の水で歯磨きにチャレンジしてみようと考えました。いつもの様に歯磨きをした後、コップ一杯の水を少しずつ口に含みうがいをしてみました。すると、いつ

もは何度も何度もコップに水を入れて使用していた私が、たった一杯の水で歯磨きを終わらせることが出来たのです。早速家族にも「試してみたい」とお願いし、チャレンジしてもらいました。するとやはり、私と同様に成功したらしく、びっくりしていました。この時私は初めて、考え方を変えるだけで、誰でも簡単に「節水」する事が出来るんだなと気付きました。

私は最後に、もし震災が起きて「断水」になった時、どんな事が一番困るかを考えました。私達人間は、一日約二リットルの水が体から汗や尿などとなって排出されています。もつと調べていくとそこには驚く事が書いてありました。人間は食べ物や十日間絶つてもひもじい思いをするだけで死にはしませんが、水分を十日間絶つと死に至るらしいのです。私には水が無いと死ぬという考えがありませんでした。人間一人が生命を維持するには、一日最低二リットルの水が絶対に必要です。

しかし、水は魔法のようにいつでも出てくれる訳ではありません。水にも限りがあり、夏ともなれば底をたいてしまう事もあります。だからこそ、今回私や私の家族が挑戦した様な「節水」がとても大切だと思いました。一人の力は小さくても、もう一人、もう一人と「節水」を心がけるだけで、きつと何かが変わると思うのです。タイトルにこめた思いのように、あなたが、そして私が流しっぱなしにしている水の一滴が、自分自身の命を救う一滴になるかもしれません。また、流しっぱなしの水を慌てて止めたあなたの思いが、誰かの命を救うかもしれないのです。

たくさんの人々の水に対する思いが、全てに人の未来を紡ぎますように。

入選

水と共に生きる

福島県 郡山市立郡山第七中学校

二年 荒井 真愛

水泳部の私にとって水の中で過ごす時間は生活の一部だ。いつも五感で水を楽しみ、誰よりも身近に水を感じている。水の浮力によって身体が軽くなり、地上では出来ない連続宙返りが水中では簡単に出来る。太陽の光を浴びた水面はキラキラと虹色に美しく輝き、一瞬で幼い頃読んだ憧れの人魚姫の物語りの世界に入り込んだような幸せな気持ちになる。

以前に外出先に洗面所で自動的に水が止まった時、手を洗い終えていない私は面倒で不便だと思わず不満を口にしたことがある。世界地図をみると、地表の約七割が水で覆われ美しい水の惑星ともいわれる地球が深刻的に水資源の危機を迎えているとは、その時の私は考えてもいなかった。

偶然目にした報道番組で小さな子供が飲み水を求めて遠くまで歩き、大変な苦勞をして茶色く濁ったコップ一杯の泥水を一口ずつ味わいながら満足そうに飲む姿は衝撃的で、私の水に対する思いが大きく変わった。

地球上の水の大半は海水であり、私達人間が直接利用できる水は、一パーセントにも満たない。世界各地では砂漠化や干ばつで水不足が悪化し河川の水を得るために国同士の紛争が起きている。安全な飲み水が手に入らず、有害物質などに汚染された水を飲んだことが原因で今この瞬間に地球の裏側で多くの尊い生命が失われている悲しい現実を受けとめなくてはならない。今は遠い国のことだが、何年後かに私自身も飲み水を求めた長い道のりを歩いているかも知れないのだから。

私の住む福島県は猪苗代湖や裏磐梯湖沼群の湖をはじめ、阿武隈川・荒川・只見川など、大小約五百の河川に恵まれ、他県にも誇れる優れた水環境だ。猪苗代湖から取水し県中部に水資源の供給をしている安積疎水は日本三大疎水の一つでもある、私達の毎日の生活を潤している。蛇口をひねればいつでも安全な水が大量に出ることをあたり前に思っていた。そのため、水は限りある資源ということ忘れ、誰かが本当に必要としている貴重な水を私は無意識に無

駄に使用していた。

水は人間の暮らしにとっても密接に関係している。生活用水として日常的に使われ、農業用水として稲作・畑作・畜産と私達の食物を育む。環境用水として公園の噴水などで人々の心を癒す。発電用水も忘れてはいけない。水力発電は自然の力により電気を作るため二酸化炭素を発生しない再生可能なクリーンエネルギーだ。水があつたからこそ、文化が栄え私達の生活が成り立っている。

今こそ、人間と水が共生すべき時だと思う。水との共生という難しく考えようとする意識を持ちながら毎日を生活する。雨水や風呂の残り湯を再利用し水を無駄に使わず節水に心がける。食器の油污れは布や新聞紙でふき取り、分解性の良い洗剤を使用し、生活排水を汚さない。これなら誰にでも今すぐ出来る。

私達が意識的に水を守ることで多くの緑の樹木や草花の命が芽生え育つ。森林では雨水を土の中に吸収し浄化して川に送るとともに温暖化の原因である二酸化炭素を吸収する。結果的には水によって私達人間そして自然界の生態系が救われて守られるのだ。水がなくなるとは、人間は生きていくことが出来ない。だから私達は、毎日の生活の中で常に水を意識し、お互いに支え合って共に生きていく気持ちを持ち、水の恩恵に感謝しなくてはならない。

「水よ、ありがとう。」

先人が知恵と工夫で大切な水という資源を守り私達に残してくれたように、今度は私達が未来の人々のために美しく輝くすばらしい水資源というバトンを受け継いでいく。いつか地球上のすべての人々が安全でおいしい水を笑顔で飲む火を日から願って……。

入選

せせらぎを取り戻せ

福島県 須賀川市立西袋中学校

三年 星 結衣

私のふる里、福島は自然と水に恵まれた美しい土地である。私は、この美しいふる里に誇りを感じている。しかし、その豊富な水が果たして有効に使われているだろうか。観光や経済のためだけでなく、私たちの生活を豊かにするために活用されなければならない。

豊かな水と流れ、そして湧水。それらは、福島の豊かな自然が与えてくれる賜物である。その水は豊かな自然の中を流れ、また伏流水となって地表に湧き出すことによって、さらに清冽なものになる。

私は、この豊かな湧水を利用できないかと考えている。それは、せせらぎを身近に取り戻すということである。日本が農業中心の国だった頃、ホタルが乱舞する光景が、全国で見られた。ところが現在ではホタルの乱舞は日常的なものではなく、観光の資源になっている場合が多い。自然保護とホタルは結びつけて考えられることが多いが、ホタルは人間生活に身近にいる昆虫である。流れが綺麗過ぎてはホタルは育たないのだ。身近にせせらぎがあり、それが生活と結びついた時、初めてホタルは、その姿を現すのだ。町なかに、湧水を利用したビオトープを作っていく。もちろん、コンクリートなどで水路を作ってはならない。昔ながらに、自然に流すのである。それを町なかの様々な場所に作り、私たちはそれを利用し思い、生活するのである。自然の流れは、そこにたくさんの命を育むはずだ。藻・水草・貝・魚など、人間があえて手を入れることはない。自然の回復力は、私たちが思っているよりもずっと早いのである。ビオトープに生物が戻ることによって、せせらぎは自然の循環の中に組み入れられる。数十年前に見られたような日本の原風景、春にはタンポポが咲き、夏にはホタルが乱舞する。そんな、豊かな自然が福島の町の中にも見られるようになるはずである。これが、私が考える湧水を中心に自然の回復力を利用した環境の改善策の一つである。

水は命を育むことができる力を持っている。それを証明している例が県内に

ある。福島市の南西、安達太良山と吾妻山の山あいには、小さな温泉がある。それが、土湯温泉である。荒川の流れる山間の小さな温泉だが、今、注目を浴びつつある。この温泉がなぜ注目を浴びるようになったのかを考えることで、湧水利用の大切さが分かる。土湯温泉の町づくりは、ホタルを呼び戻そうという運動から始まった。それは、二十年前のホタルが乱舞する風景を取り戻したいという願いからであった。作られたビオトープにホタルの幼虫と、カワニナが放流された。ビオトープは各地の学校などで作られているが、自然を巻き戻すという発想が大切であると、私は考えている。自然は作られるものではない。少しでも時計の針を戻してやることによって、自然は生命を呼び戻すことができるのだ。更に、ビオトープで町中を繋ぐという構想を実現していった。このことは、私たちが湧水を利用した町づくりを考える上で大きなヒントになっている。多くの町で、繋ぐという発想でビオトープを作ることができれば、湧水が多い福島県は、その豊かな水の力で魅力的なせせらぎが各所に生まれるに違いない。現に土湯のビオトープは、多くの昆虫・植物そして清流を生み出したのだから。この町づくりの実践は、せせらぎを町なかに甦らせた好例である。やればできるのだ。

水には命を繋ぐ力、命を育む力がある。それを知っていた人間は、太古の昔から水と共に生きてきた。だから、水を支配するなどという傲慢な考えを持たずに、水と共に生きるといふ視点が、今の私たちにとって必要ではないだろうか。人間は、水を生かして使うことができるけれど、水によってその存在を無くしてしまうこともあるのだということをおぼえてはならない。

入選

「世界と水」

栃木県 栃木市立東陽中学校

二年 服部 真由子

私の生活では、水道の蛇口をひねれば、透明できれいな水が出てきます。それを当然だと私は思っていました。日本では、どこへ行ってもきれいな水が飲めないことがなかったので、きれいな水がない世界のことなど考えたこともありませんでした。しかし、夏休みにグアム島に旅行し、水道水が飲めないことを体験しました。コンビニに行き、水を何リットルも買うことになり、とても驚きました。水は決してあつて当然のものではないのです。

そんな時、「もしも世界が百人の村だったら」というテレビ番組を見ました。その村では、子供達が朝早くから何キロも離れた池までの道を何回も往復して水を運んでいました。しかも水はほとんど泥水。その泥水を飲み、生活用水として利用していました。その結果、子供達は皆伝染病に罹っていました。私にはあたりまえの透明で安全な水を思い、世界の差を知りました。あの子供達にも透明で安全な水を飲ませてあげたいと思い、そのテレビ局の募金活動に協力しました。

一年たち、その村の様子が再び番組で取り上げられました。あの時の募金で井戸水が掘られていました。砂漠地帯でなかなか水を掘りあてられません。一度はあきらめの声も上がりましたが、それでも、何としてもきれいな水をと頑張っている日本人スタッフの姿を私は祈るような思いで見つめていました。乾いていた土が段々黒く湿り、ついに水が噴き出した瞬間は涙があふれて止まりませんでした。画面の向こうで、村の人達がみんな笑顔できれいな水を飲んでる。そのことに私も少し協力できた。そのことが嬉しくて、今でもあの時の感動が甦ってきます。

このことで、私は改めて水の大切さを感じました。井戸が掘れるまで泥水を飲んでいた少年は伝染病で下半身不随となり、いつも地面に足を引きずりながら移動していました。開発途上国では一日に三千九百人の子供が亡くなっている」と知り、愕然としました。これだけ水というものが私達人間の生活に欠か

せないものであり、なおかつきれいで安全でなければならぬと感じました。そして、日本では水に関する施設等が整備され、いつでもきれいな水が使えることに感謝しなければいけないと思います。

しかし、一方できれいな水がいつでも使えるために、人々の水環境への意識が薄れているようにも感じています。

私がある山に登った時、きれいな川を見つければ、その水をすくって飲むと、体中に水が行き渡り、そのおいしさにとっても感動しました。ところが別の山では、登山道に空き缶が散乱していました。休憩所まで行くと、小さな川が流れていて、水を飲むとすると、地元の人に飲まないように止められてしまいました。「昔はもっとたくさんさんの水が流れていて、とってもおいしい水が飲めたんだよ。」と、寂しそうに教えてくれました。

このように豊かな自然の恵みが少しずつ消えつつあるのです。自分たちはきれいで安全な水が飲めるからすこしくらい汚しても問題はないというものは絶対にない。もしあまい考えを持っていてる人がいたら、今すぐ改めて欲しいと思います。恵まれた水環境であるからこそ、私達はもつと自然を大切にしなければいけません。きれいで安全な水を維持する設備や活動についても学ばなければいけません。そして、日本が水の大切さについて世界のお手本の国となれば、今以上に水に恵まれない国への活動も推進していけると思います。

命あるものすべてに欠くことのできない水。生命の源であり、人の生活や自然、そして人の心を潤す水、この大切な水を守るために私のできることから、まず始めていきます。生活排水を汚さない工夫や節水と、小さなことから始め、その活動の輪を私から家族へ、友達へ、地域へと広げていきたいです。

入選

大切な美味しい水

千葉県 昭和学院中学校
一年 萩原 聖名子

いつも当たり前前に飲んでいる水。母が調理や片付けに使う水。家族がトイレや洗面、お風呂で毎日使う水。学校でも使う水。そのような普段何気なく使っている水について真剣に考えたことはありませんでした。

また、私が知っていた水は、生活面で使うものばかりでした。しかし色々調べてみると、原料用、製品処理用、ボイラー用、温度調節用など広い範囲にわたって使用される「工業用水」と稲作、野菜、果樹などの生育に使われたり牛、豚、鶏などの家畜に使われる「農業用水」などがあることを知りました。しかも農業用水は平成十八年度の統計で年間五百四十七億立方メートルとその使用量もぼう大なものです。

生活用水も家庭で使う家庭用水と学校、会社、病院、デパート、ホテルなど都市活動用として一人当たり一日で三百リットルも使用していることがわかりました。

私たちが世代が水について考えることが少ないのは、水が不足していることがほとんどなく、安心安全な水の飲める国に生まれたからだだと思います。

数年前、海外に行った時に水道水が飲みにくいことがありました。そこで水道水が美味しく飲める国や都市を調べてみると、日本、バンクーバー、ホノルル、サンフランシスコ、デトロイト、アトランタ、ヘルシンキ、ストックホルム、コペンハーゲン、ウィーンの十一都市しかなく、世界の八割が美味しい水道水を飲めないと分かりました。主な理由は、硬質や軟質であったり、水に匂いがある。放射能がふくまれている。土壌が汚染されている。バクテリアが多い。などです。

日本の水道普及は、九十九パーセントを超えています。しかし、世界では飲用可能な水の恩恵を受けていない人々が約十一億人いると言われています。これは地球上全人口の五分の一の人に相当します。また、日本は必要なダムや治水技術の高さにより水害が少ない国とも言えます。

太陽エネルギーを主因として起きる水の循環は地球における継続的なものですが、安全な飲み水に変える浄水技術も日本の水について語る時、大きなポイントと言えます。

様々な場面でメディアが伝える水の災害や飲み水の不足、不衛生な水に起因する病気など今でも世界で問題が沢山あり、日本の高い技術が活かされればと考えます。飲み水に困っている国の事を考えると安全な浄水システムの普及活動の大切さも感じます。

水について考える時、まず私達がすぐできる事から始めたいのは、家庭や学校でも「水の大切さ」をその使う場所で文字やポスターで明記し、節水する習慣を皆でつけること。今まで以上に川や海を汚さない意識を持つこと。生活用水の量や洗剤の使い方の工夫も一人一人の積み重ねで大きな輪になっていくと思います。

私は今回、「水について考える」というテーマの中で色々な事を調べ考えました。今まで全く知らなかった場所で水が活用されている事を学び、改めて水の大切さを認識しました。

入選

もしも水道が無かったら

千葉県 東海大学付属浦安高等学校中等部

一年 今 貴志

「何これ、どうしちゃったんだろう」

今年の春休みの夕方、一階の洗面台の方から母の大きな声が聞こえてきた。しばらくすると、ばたばた動き回っていた母が三年前に洗面台をリフォームした時の業者と電話で話し始めた。どうやら洗面台から水が漏れて水浸しになっ
たらしい。

業者が来るまでの二時間の間「あ、そうだ、ここは使えないんだ」と二階の洗面台に行くのがとても面倒に感じた。

修理が終わる頃、母から呼ばれて洗面台に行った。僕が熱帯魚の飼育で水槽で使うゴムの吸盤があった。透き通っているはずのゴムは、茶色に変色してぶよぶよになっていた。水漏れの原因は、吸盤が配管に詰まり、無理な圧力がかかって破損してしまったらしい。ショックだった。

水道は便利だ。朝、僕は起きるとまずトイレで水を使い初める。歯みがき、洗顔、洗濯、料理、入浴など生活で使うきれいな水が僕の住む日本では蛇口から当たり前のように出てくる。僕たちは一日に二百五十リットルの水を使っていると聞いたことがある。もし家に水道が無かったら、どうやって水を手に入れたらいいのだろう。僕の家から一番近くて十分ぐらいで行ける川がある。海の近くで汽水だ。飲める水ではないし、生活用水にも使えない。もし使えなくても、二百五十リットルの水を毎日確保するとしたら水運びに時間もかかり、学校に通って先生や友達とも会えなくなる。考えるだけでも「そんなの嫌だな」と思った。

でも、僕はそういう映像を見たことがある。ルワンダ共和国の少女が素足にサンダルで水桶を運んでいた映像だ。ルワンダは丘陵地が多く、そこに住む人々は、生活用水の水源を谷間にある湧水、湖や沼、河川に依存していて、高低差百メートル以上の急な坂道を上り下りをして水を運搬しているそうだ。そして利用している水源は細菌に汚染されているという。それでも生活に必要な水を、

ルワンダの人々は、毎日時間をかけて運ぶそうだ。少女の映像を思い出すとルワンダにも日本のような水道ができればいいのにな」と何度も考えてしまう。僕は、毎日使っている「水道」のことが気になって調べてみることにした。「水道」は、生活のために水を供給・処理する事業・施設のことで、上水道、中水道、下水道、簡易水道、工業用水道に大別される。一般的には上水道を指して水道と呼ぶことが多い。日本では、室町時代の後期に小田原上水が建設されていたことがわかりとても驚いた。江戸時代には神田上水や玉川上水を始め全国に水道が建設され、明治時代には西洋の近代的水道が導入された。各地でダム建設など、水の確保がされた。浄水場では、ろ過や沈殿凝集、消毒などの処理が行われ、水質が保たれている。この水が蛇口をひねると出てくる。こうして調べてみると、「便利で安全な水道が無くなったら困るな」とやっぱり思う。

この数日、学校から帰ると水に関することをたくさん考えた。限りある大切な水をこのまま使い続けるにはどうしたら良いか考えた。自分で今日からできる節水、ダムや浄水場の仕組み、河川を汚さないこと、森林伐採のこと、海水を利用する研究など、水のことを意識して過ごした。でも本当に大切なのは、この数日だけではなく、普段から意識して生活することだ、と思った。

入選

世界を旅する水

千葉県 鴨川市立鴨川中学校

二年 鈴木 千尋

水は世界をめぐるります。川を流れる水は海に辿り着き、太陽の熱で蒸発して雲になります。雲はシロナガスクジラ二頭分もの重さになって空を旅します。北の国に行つて雪になって、再び地上に戻ってきます。

水は地下にしみたり、川になつたりして、また循環の輪は続いていきます。今、水道の蛇口をひねってコップに汲んだ一杯の水は、暑いサバンナでゾウが水浴びをした泥水だったのかもしれないし、水源でホッキョクグマの背中に降った雪だったのかもしれない。いいえ、ザトウクジラが息をしようと潮を吹いた時に空に舞い上がった水の粒だったのかも……。

世界中を旅して私の元によつてきた水。その水を飲む時、私はロマンを感じずにはいられません。

このように世界をめぐるってきた水を私たちの生活に便利に使うために、日本では水道が普及しています。

日本に水道普及率は97%以上にもなり、その水源の70%は河川や湖沼から、30%は地下水等に頼っています。しかし、現代、その河川の汚染が問題となっています。それも私たちの家庭からの生活排水によって。

私はシャンプーで髪を洗います。服は洗剤で洗います。使った食器も台所用洗剤できれいにします。マヨネーズやしょう油を料理に使うし、お米のとき汁は排水口に流してしまします。これらが生活排水です。一日につき一人あたり200L以上の量です。

川には自浄能力といって、自ら水をきれいにする力がありますが、毎日、家庭からでる多量の生活排水を、もし川に流してしまつたら、川は水をきれいにすることができずしょうか。

一回髪を洗う時に、シャンプーを6ml使います。これを魚が住めるようにきれいにするには風呂の水(300L)で1.6杯(480L)が必要。米のとき汁(750ml)が風呂0.9杯(270L)。飲み残した牛乳(180ml)

1)が、なんと、風呂の水13杯(3,900L)もの水がなければ魚は生きていけないのです。

下水処理場を通せば、生活排水はきれいにされてから川や海に流されます。でも下水道の普及は上水道より進んでいません。人口の少ない市町村では4%程という所もあります。

私たちの水を支える河川は私たちの生活排水によって汚されているのです。では、どうしたら水の汚れを減らせるのでしょうか。

料理を食べたあとの皿に、油やマヨネーズがついています。水で流す前に、捨てる紙でちよつと汚れを拭き取ります。シャンプーは使いすぎないようにします。洗濯洗剤はちゃんと分量を量って使います。お米のとき汁は草花の水やりに使うといい肥料になるそうです。風呂の残り湯も洗濯に再利用できるし、花の水やりにも使えるでしょう。もちろん、ジュースや牛乳などは飲む分だけコップについて飲み残しのないようにします。

アフリカのことわざに「たぐさんの小さな子どもたちが、たぐさんの小さな村で、たぐさんの小さなことをしたら、世界はかわるだろう。」というのがあるそうです。

私たちにできる事は、簡単で小さな行動です。でも多くの人が行動に移してくれたら、それは大きな結果をだすのではないでしょうか。

その結果はめぐる水と共に世界に広がり、多くの命を支えることになっていくのです。

世界を旅する水。命の水。私の元から旅立つ水は、できるだけきれいなまま、多くの命とふれ合う旅をすることでしょう。

入選

今、当たり前前にできる幸せ

東京都 大田区立大森東中学校

三年 長井 奈々

「水を流しっぱなしにしちゃダメでしょ。」
私の母の口ぐせだ。私は「どうして？」と疑問に思うばかりで、「別にいいじゃん」という考えを持っていた。あの時までは。

ある日、学校の総合の授業で一本のビデオを見た。今思えば、そのビデオを見たことが私の考え方を、大きく変えたのだと思う。

そのビデオは、ある貧しい国についてのものだった。シエラレオネという国の話だ。世界では、国の豊かさ、生活の豊かさなどを基準とした人間開発指数というものがある。日本は百七十数カ国の中でも、八位に入る程の豊かな国である。しかし、シエラレオネは、百七十数カ国の中の最下位である。そんなシエラレオネの現況を、私たちはビデオを通して知った。その状況はあまりにも悲惨なものだった。親がいなかったり、住む家がなかったり、食べ物も不十分だったり。私たちにっては考えがたいことばかりだった。そして、なにより一番驚いたことがある。それは、水が濁っていたことだ。ほぼ泥のような水の子供たちは、何のためらいもなく飲んでいった。私はそれを見た瞬間、言葉が出ず唾然としてしまった。でも子供たちは「これしか水がないの」と言っていて飲んでいた。私には想像もつかない現実だった。

その日、家に帰って手を洗おうとした時だった。蛇口をひねって、ふと思っただ。透明な水が出ている。今でも考えもしなかったことだった。お風呂に入ろうとした時も、「これだけの透明な水を、シエラレオネの人は見たことがあるのだろうか？」と思った。この日、私は水のことまで頭がいっぱいだった。これだけ水について深く考えたのは初めてだった。今まで当たり前のように水を使って生活して来た。特に私は、水をだしっぱなしにしたり、無駄に使うことが多々あった。その度母に怒られていた。それでも「何故？」と疑問に思うばかりで、平気で水を出しっぱなしにし続けてきた。でも、やっと母の言葉の意味が分かった気がする。その事を母に話したら、「今、当たり前前にできることが、明日、

当たり前前にできるとは限らない」と言われた。水は生活に必要な不可欠なんだと思っただ。この日を境に私は、水の出しっぱなし、無駄使いをやめた。少しでも節約して、シエラレオネのような国に貢献できればと思った。

今、蛇口をひねって、透明で飲める水が出てくる国は、世界でも少ないと言われている。何故、日本は蛇口をひねると透明で飲める水が出るのだろうか？日本には四季があり、雨もよく降る。森林もたくさんあり、自然が多い。梅雨の時期には、雨がたくさん降り、その雨が川や海となって、長い年月をかけて私たちの飲み水となる。私たちの飲み水となるまでの間には、たくさんの人々が努力して、幾度も幾度も洗浄している。こうして、たくさんの人々の手がかかって、私たちの飲み水となっている。赤道近くの国や、雨があまり降らない国、シエラレオネのように技術面などが進んでいない国などは、日本のように綺麗な水は飲めないのだろうと思う。日本は、季節にも恵まれ、雨もよく降り、技術面もとても進んでいる。その水を当たり前のように、私たちは水を使って生活している。

今、私は「当たり前前にできることがどれだけ幸せか、あなたに分かりますか？」とみんなに聞きたい。当たり前前にできることがとても素晴らしいことで、幸せだということを忘れないで。当たり前前にできる陰には、それを作り上げている技術、知恵、支えている人がいるということを忘れないで。一人ひとりがそう考えることができた日には、きっと世界の中で、綺麗な水が飲めるようになっていくはずだ。

入選

「知識」を「意識」に変える

神奈川県 川崎市立麻生中学校

三年 岩下 紫

私は中一の夏から山登りを始め、百名山登頂を目指しているのですが、山に入ると水の大切さがよくわかります。山小屋では様々な節水の工夫に驚かされます。特に、初めて登った富士山での水との関わり方は忘れられません。トイレの水は雨水を利用して、しかもコップ一杯程度の必要最低限の量しか流れない仕組みになっています。手洗いの水も、ししおどしのようにペットボトルをいくつか組み合わせて一回分が量られ、ゆつくりチョロチョロと流れるようになっていました。そんな少ない量でもきちんと用が足せるのに、普段の生活の中では、自分がどれほど水を無駄に使っているかという事を、とても反省させられました。そして、下山して五合目の山小屋へ戻ってきた時、出発の準備をしていた時のある光景を思い出したのです。それは、おそらく麓から巡回にきていたらしい警察官が、パトカーのトランクから水の入った白いポリタンクを3つ降ろして、「今日はこれだけしか持ってこれなかったよ」というような会話を山小屋のおじさんと交わっていたことです。そのやりとりを耳にした時は気にも留めていませんでしたが、山小屋の水は麓から運んでいたのだという事実を、恥ずかしながら、その時ようやくはつきりと理解できたのです。普段の私たちの生活では蛇口をひねれば水がいくらでも使えますが、山には上水道がひかれています。ですから給水車やポリタンクを使っての人力で五合目まで水を運び、さらに上の山小屋へはブルドーザーを使って運び上げるのだそうです。長い登山の工程を通して、水の貴重さを本当に実感しました。

日本は諸外国に比べると、とても水に恵まれています。私たちは不自由なく水がたっぷり使えることに慣れてしまい、水が簡単に手に入らないとどんなに不便で困るのかという事を考えもせず、大切に使うという意識も失ってしまっているように感じます。当たり前だと思っていることが、本当はどれほど恵まれたことなのか、思いをめぐらすことが必要だと思います。

山小屋で行われているようなしくみを改良して都会に導入したら、きっと大

量の節水ができるのではないのでしょうか。以前、ハンガリーやチェコに行った時、トイレの水は日本のようにたくさん流れませんでした。国が貧しく日本のように設備が整っていないからとも言えますが、やはり日本は水をぜいたくに使いすぎていると思います。節水は、浄水処理をするためのエネルギーを減らすことにもつながり、また排水による環境負荷の削減にもなるので、単に水を節約するだけの話ではないと理科で学習しました。つまり「水は大切だ」とか「節水は無駄なエネルギーを減らして環境保護のためには必要なこと」という知識はほとんどの人が知っていることのはずです。けれど、その事をいつも意識してきちんと節水を心がけている人は、実はとても少ないのではないのでしょうか。「分かっていること」が、必ずしも「できること（実行していること）」になっていないからでしょう。

私は母から、「知識を意識に変えなさい」とよく言われます。知識を持っていても、それが「できる」、つまり実際の行動に移す事ができなければ意味はないということです。節水も一人ひとりがほんの少し今よりも意識を持って行動することが増えれば、大きな効果を生むであろうことは確かです。

私は今まで自分なりに節水を心がけてきましたが、これからも便利さに慣れて水に対する感謝の心を忘れることのないように気をつけます。また、知識を意識に変えて行動できる人が増えるように、私が山で体験したことや感じた事を友だちに伝えていきます。これが、私の「知識」を「意識」に変えることなのだと思います。

入選

「緑のダム」を守る」

神奈川県 山北町立三保中学校

三年 鈴木 沙也花

蛇口をひねれば、いつでも透明で、きれいな水がでてくる。その水は安全でおいしい。その水を飲みながら、ふと思った。この水ってどこから来ているんだらう。もちろん水道を通ってきていることは知っている。けれど、もっと戻ると、どこから来ているのかは、知らない。

私はどこから来ているかを調べてみた。水道から出てくる水は、川の取水堰から取り入れられ、浄水場へ送られ、砂やドロやゴミが取り除かれ、きれいな水となり、塩素消毒をされ、私達の元にとどくことがわかった。この役割は水道施設だ。この施設がなければ、私達のもとに安全でおいしい水はこない。蛇口をひねってもドロ水しかでてこなければ、私達は、とてもじゃないが生活はできないと思う。飲めないし、洗濯もできない。そんな生活には、私は耐えられないと思う。

我が家の水道には、地区水道という地区でつくった水道がある。地区水道は、地区で水槽タンクをつくり、川から水をひき、そこで消毒してから供給される。もう一つの水道は町営水道で、この水道も水槽タンクがあり、そこから供給されている。町営水道で使わなくてあふれた水は地区水道のタンクにまわる。

そのタンクにある水は川からきている。その川の水は、雨水を蓄えている森林を水源としている。森林は、雨水を蓄えつつゆっくり流し続けることから「緑のダム」と言われている。他にも山崩れや洪水を防いだり、二酸化炭素を吸収するなど、様々な働きを持っている。その「緑のダム」の中で、雨水は、落ち葉や土などを通して水中のゴミがとれ、きれいな水となり、川の水となって、流れていく。

また、川に流れている水の量を調整する操作を行っているのは、ダムだ。このダムの役割によって年間を通じて安定的に利用できる水量を確保することができるのだ。

こういった色々な役割を持った場所を水が通って、私達の元に安全でおいし

い水となり、届けられるのだ。それぞれの役割を持っている森林やダムや、水道施設がなければ私達の元に水は届けられない。その一方で、ダムや水道施設とは違い、森林は自然の恵みだ。今、神奈川県は人工林、自然林は荒廃が進んでいる。森林伐採により、裸地状態であった森林はその後、スギ、ヒノキの植林が進められ、量的には大幅に増えた。しかし、私有林を中心に手入れ不足の人工林が増加している。また、自然林では、ブナやモミの枯死などが進んでいる。私達の元に水が届くためには「緑のダム」は不可欠であるのに、その「緑のダム」が危機的な状態であったら、今後、安定的な水の供給はのぞめないだらう。

私は、水がどこから来ているのか調べて、今まで気にもせず飲んでいた水が、私の元に来るまでに長い時間がかかっていることがわかった。雨が降り、山に蓄えられ、川になって、私達の元へ来たり、海になって、また雨になる。こんな簡単そうに見える水の循環も、とても長い時間がかかっているのだと思うと、私の水に対する見方がまた、変わってきた。自然の力や、人の力を受けて水は私達のもとへやって来る。このことを知り、私は水の貴重さが実感できた。

しかし今、「緑のダム」が危機的な状態ということは、その貴重な水が安定的に供給されなくなってしまう。喉が渴いても水は飲めず、お風呂に入ることや、体も洗えない生活になってしまうかもしれない。そんなことにならないためにも、私達は「緑のダム」である森林を守っていかなければならないと思う。

入選

「水の国、日本」

富山県 高岡市立高陵中学校

三年 亀井 香菜子

なぜその景色は美しいのだろう。ふと思った。それは、車の窓から何気なくのぞいていた景色。鮮やかな緑色。その中を静かに流れていく川。川は、その透き通る水に太陽の光を反射させ、キラキラと輝いていた。

修学旅行で行った、広島、京都。様々な木があり、深い緑から、爽やかな黄緑までの美しい木々の中に、ふわっとふき出す噴水。そよそよと流れる川。全く知らない場所なのに、太陽に輝くその場所は、私の心を癒し、なぜだか懐かしいような気持ちにさせた。

蛇口をひねれば、すぐにきれいな水が出てくる。コップに入れて飲むことなんて簡単だ。私は、水のない生活など体験したことがない。富山県という水の豊かな地に生まれ、今日まで水に不自由したことなんてない。「大切にしない」「無駄にしないで」そんな言葉たちに「わかっている」と適当な返事。正直、「大切にしないで」「無駄にしてはいけない」という事実はわかっている。不自由したことの無い私には人ごとのようにしか聞こえないのだ。わかっている。でも大切にしたいって何が変わるのだろうか。無駄にしたって、この蛇口からはまた水が出るでしょう？

そう思っていたが、ある時、テレビでアフリカの子供たちの水をくみに行く姿を見た。そして、大きな衝撃を受けた。今の私なら、何秒もしないで水を手に入れることができるのに、彼らは何百メートルも重い水を持って歩いていく。くんでいる水は、ひどく濁った、菌や害虫だらけの水。その水を飲んだために死んでいく人がたくさんいるらしい。私が今その場所にいたとして、水を勧められても絶対に飲めない。でもどうして彼らは飲むのか。その理由はただ一つ。他に飲めるものがないのだ。私はおいしい水を知っている。でも、もしその場所に生まれていたら、私もその水を飲んでいるだろう。そう思うとゾッとす。そして、今の自分の豊かさを強く感じる。

「日本は水が豊か」その事実、誰もが知っているはず。でもそれがどれほ

ど幸せなことか、本当の意味を多くの人は知らない。だから海や川にゴミを捨てる。ぜいたくに水を使う。私もそうだった。それは、豊かすぎて、幸せすぎてわからないのかもしれない。でも、それでいいわけではない。幸せな私たちだからこそ、この水を守り続けていかなくてはいけないと思う。私たちが一番に水の大切さを感じなくてはならないと思う。

なぜその景色は美しいのだろう。海や川、噴水などの「水のある景色」を美しいと思うのはなぜだろう。私は、「水のある景色」を「日本の景色」と思う。日本は古くから水に恵まれ、また大切にしてきた。懐かしい気持ちになったのは、私の中で、緑や水のある景色が「日本」というふるさとのイメージがあったからではないだろうか。思い出すのは、幼い頃の夏。川に入り、水の冷たさに癒されたこと。魚を見つけて驚きながらも手をのばしたこと。でも、近年、その景色は大切にされているとは言えない姿になっていると思う。たくさん洗剤が流れて、またはゴミで汚れて魚が生きられなくなっていく。その現実、気づいている人はどのくらいいるのだろうか。その現実を改善していくために、努力している人は何人いるのだろうか。

今と昔では、何が変わってしまったのか。私は、ずっと美しい日本の姿が在ってほしい。水がきれいな日本を誇りに思っていた。私もこれから動き出さなくてはならない。そう思った。

入選

「水と共に生まれ、水と共に生きる」

京都府 京都学園中学校

一年 辻 晏奈

母の卵子、父の精子が巡り合い、私は世界でたった一つの受精卵となりました。その時の水分は約95%。およそ280日間、羊水と共に成長してきました。成人する時、体内の水分量は約70%。私は「水と共に」生まれました。そして「水と共に」これからも成長していきます。水は人間にとって、無くってはならない大切な存在です。しかし人間が存在した事により、水は今までの水質を失ってしまいました。つまり、水にとって今の人間の存在はただの邪魔物ではないのです。

私の住んでいる地域には、一級河川の天神川があります。春になると花見に来る人が多く、川は桜の花びらでピンクのベッドを造ります。そこを通る度に私は心が和み、いやな事なんてどこかへ飛んでいってしまうほど素敵です。しかし、桜の花びらが散る頃、天神川は、驚く程様々な種類のゴミが散乱しているのです。「いつかはだして水遊び」「いつかホタルと夕涼み」と地域の夢が描かれた看板と現実を目の前にし、毎年私の心は暗くなるのです。小学校四年生の時、天神川の水質検査をしました。水質検査試験紙を使って検査すると、赤い色に近い反応色が出たので、少し汚れているという結果になりました。さらに天神川には、コカゲロウやシマイシビルが沢山いて、そのような生き物は少し汚染された川に住むらしいのです。しかし私は、もっと汚れているだろうと予想していたので、ほんの少しホッとしました。そして、あの看板に描かれている事も、夢ではないと、もう少しで届きそうな未来に希望が持てました。その夢を現実にする為に私達は天神川のゴミ拾いを学年全員でする事にしました。みんなゴミ袋を持ちよって、テキパキと動きました。普通ならば落ちてはいるはずのないタイヤのような大きな物や見逃してしまうような小さなお菓子の袋など、様々な種類のゴミが散乱していました。どんな小さなゴミでも、一生懸命拾いました。とても大変だったけれど、みんなの表情、そして高い所から眺めた天神川が、やる前とやった後では、あきらかに変化しているのを感じ、疲れ

なんて消えさきり、変わりに喜びで胸がいっぱいになりました。目に見える変化もありました。なんと、コカゲロウなどが少なくなり、ヒラタカゲロウが見られるようになったのです。ちなみにヒラタカゲロウは、綺麗な川にしか住まない生き物だそうです。一人一人が少しの時間を費やし、少しの努力をする事で、天神川や天神川に対するみんなの意識が変化する事を知り、とても嬉しくなりました。

天神川は、人の手で汚染されているので、そのまま飲めないという事が四年生の体験で分かりました。そして次の年、宿泊学習で芦生の森に登りました。この森は、人の手が加わっていない大自然で、まるで今にも鹿などが出てきそうな雰囲気でした。しばらく登ると、そこですばらしい物を発見しました。「水源」です。海や川の赤ちゃんのような「水源」は、そのまま飲む事が出来、何とも言えない気持ちになりました。水道水では味わう事が出来ない、大自然の味がしました。今でもその味が忘れられません。芦生の森の水は人の手で汚染されていないのでそのまま飲む事が出来るのだと知りました。大自然を体中で感じる事が出来、本当に素晴らしい体験をしたと思います。

二つの体験を通じて私は気付いた事があります。芦生の森の水のようにきれいだった物を自分達の手で天神川のような水にしてしまったという事です。汚してしまったのだから、それをもとに戻すのは当たり前です。私達は水によって生かされていて、「水と共に」生きています。今の人間は水にとつてただの邪魔物ですが、そんな自分を追いほらい、天神川だけでなく沢山の川が水源のようになるよう、少しずつ努力していきます。

入選

「洗面器三はいからはじめよう」

大阪府 大阪教育大学附属池田中学校

一年 山口 穰

ぼくが住んでいる西宮市は「宮水」が有名だ。「宮水」というのは、幕末の頃から良質な酒の原料として使われている、とても歴史のある水である。

しかし、昭和の中頃の高度経済成長期に、西宮は阪神工業地帯の真ん中に置かれ、宮水への汚染も心配されることになったそうだ。実際、その頃の水質に汚濁があったことも調査で判明している。そんな中でも、地域住民や企業は宮水保全のための努力をずっと続けてきた。例えば、阪神高速三号神戸線の橋脚は、宮水地帯付近では間かくが極めて広く取られており、宮水の保全と産業発展の両立が図られているとのこと。その結果、今でも奇跡的にきれいな水が保たれ、環境省の「名水百選」にも選ばれている。また、「エコ」の意識があまりない昭和の時代に、利害が反するはずの地域と企業が協力して宮水を守ろうと努力してきたことがすごいと思う。

ぼくは時代劇をよく見るが、昔の人々はあまり水を使っていない。必要な分だけ井戸からくんで、必要な分だけ使っている。江戸時代の人々は、たらい一ぱいの湯で入浴をすましていたそうだ。

そこで、ぼくも昔の人にならって洗面器三はいの湯で体と頭を洗うことに挑戦してみた。いつも通りのやり方では絶対湯が足らなくなる。そこで、洗い方を考えた。まず、洗面器半分の湯で体と頭をざっとぬらして洗う。残りの半分と二はい目で頭の泡を全て流し、最後の一ぱいで体の泡を流す。結果的に成功。が、泡が残らないよう体のすみずみまで気をつかいながらの入浴は、かえって疲れてしまった。しかし、いつものように十分間シャワーを使い続けたとすると約百二十リットルの水を使うことになるが、洗面器三はいだとわずか八リットルの水ですむ。歯みがきもコップ一ぱい程度ですましていたそうだ。「完全なリサイクル社会」だったという江戸時代に学ぶことはまだまだありそうだ。

じゃ口をひねると水がいくらかでも出てくる現在、昔のような生活を毎日するのは難しいと思うが、今のぼくたちにもできることはあると思う。洗面器の中

の湯のように、実際「これだけ」と目に見える量が示されれば、おのずと節水の意識がでてくる。じゃ口の後ろには、無限の水があると思っただけいけない、いつも洗面器三はいしかないと思っただけ大切に使用したいと思う。

こうした身近なところから節水を考えられるのは「EWCにしのみや」の活動のおかげかもしれない。「EWCにしのみや」というのは、地域の環境保全団体で、誰でも簡単に取り組めるエコ、楽しみながら続けられるエコを紹介してくれている。

例えば、トイレではできるだけ「大」ではなく「小」で流すことだ。そうすることで、約二リットルの水を節約できる。また、歯みがきのとき、水道の水を一分間出しっぱなしにすると、約コップ六十ぱい分の水がムダになる。こういった、今日からでも実行できることを学ぶことが第一歩だ。

限りある水資源を守るためにも、じゃ口の後ろに「洗面器三はいの湯」しかないと思っただけ、ぼくたちはごくごく身近なことから実行していこうと思う。それが、ぼくたちの宮水の守り方だ。